

井上 希道

坐に先だつて

私たちはどこまでも道を追求していく仏道修行者です。仏教研究者とは根本が違います。真実に行ずる事です。真実に坐禅することです。古来の禅スタイルに拘らず、坐禅の当体に成ることです。不純物無しの坐禅です。只、坐禅です。この時、自己もなく善悪もなく、大自然に蕩尽して他に何も無いのです。

ここが修行の急所です。総てを手放してしまうことです。これが禅定です。従って禅定を錬ることが修行の本旨ですから、総てを離し切って、縁のままに在れば良いのです。草臥れたならば身体を横たえて錬る、即ち寝た状態で禅定を錬ればよいのです。

ただ少林窟で坐禅をなさった方はお分かりですが、大切なポイントがはっきりしなければ、寝坐禅は出来ません。しようと努力しても、身体が横になると身体的な緊張が消失するために心が散漫になってしまうからです。

身体と心との関係は本来一如ですが、認めて情報化しようとする思考回路が身に付いたために、心身が遊離し隔たったのです。これによって自我と言う心的塊物が出来たのです。すぐ自己を立てて理屈を言う癖のことです。認めなければ、心に取り上げなければそのまま成仏です。認めると言うことは自己があるからです。自己が有れば情報化し対立して理屈に踊らされるのです。まとまりがつかなくて葛藤するのです。それ故に坐禅にも成らないし、況や寝坐禅など及びも付かないことです。

それで前後の無い瞬間の端的に気が付いたならば、それを離さなければ心が散漫しないので、寝坐禅が出来るのです。寝ても今、立っても今、今一息には変わりがない事実がちゃんとあるからです。この一点が明確化して始めて本当の坐禅が出来るのです。本当の坐禅が出来ると、本当の歩行も一息も出来るようになり、次第に縁のままに淡々とやっていけるようになるのです。

そういうことがありますので、姿勢というものの、あながち何でもよいとは言うものの、あの古来からの坐禅のいいところは自然に必要な緊張感が伴い、でれ一つとなり難しく気も散漫し難いところが優れているのです。知性に感性に意志が自然に深く重なり統一しやすい形態なのです。ただ気を付けなければいけないのは、可成り無理な人もありますので、決して絶対視しないことです。どこまでも形よりも内容ですから。

今日は椅子坐禅を試みてもらいます。私今坐ってみましてね、深く腰を掛けると、腰の力が抜けて気が散漫しやすい状態になりますので、腰掛けは半分前くらいにしてください。そうすると足腰に力が自然に入り、必要な緊張感が漲って心身の統一に有利です。

さらに少林窟固有の方法として腰を捻りますので、深く腰を掛けない方が総てにわたって都合が良いのです。

話しは坐禅からちょっと逸れますけれども聞いて下さい。最近の子供たちは姿勢が良くないですね。これは成長過程で、必要に応じて心身をきりっとする事がないからです。この事は精神が成長し構造化して行く上でとても重要な事柄なのです。精神に主体性をもたらせる基本だからです。

慎むべき所では慎む。この精神作用は自律の根本です。ふざけや怠慢心や邪な気持ちなど、精神に負の作用をもたらせ不純にする心を一瞬に払拭する浄化力であり上位自己です。自己の本分に立ち返って毅然とする徳性作用です。この精神は人格の基盤ですから、成長段階でうまく養えるかどうか、その子供の人間性の善し悪しを決定することになるのです。

とにかく子供の時からの姿勢が精神に多大な影響があるというお話しです。言うなれば身体と心の円満統一体として育てるのが理想であるわけで、そのためにはどうしても心身を統理する緊張感が、節目節目に欠かせないということです。謹むべき時には、瞬時に心を改められるかどうかです。それが態度に反映するのです。理屈無く瞬時に、普通から高次へと調律することが出来ないならば、それは精神構造として言えば、中心となる柱が無いからです。

こうした大切な中心がない場合は、区別を付ける能力が貧弱ですから、同時に尊厳性・高貴性も育たないのです。それで時々見る、あの無教養で傍若無尽な振る舞いとか、無分別故に考えられないような変なことをするのは、根底に自己調律機能が育っていないという因果関係によるものです。

社会に立ったとき、今自分をいかにあらしめるべきか。この事は或る程度大人になれば分かることですが、きちんと身に付いているかどうかとなると怪しいのです。それは精神がそのように成長していないからです。この自覚が健全な存在感となり自尊心にもなるのです。それが元になって始めて思考の手順が健全に育つのです。精神をきりっと引き締めるには、態度即ち姿勢が瞬時に整えられるか否かです。踵をぴたっと付けて直立する、そして坐るときには背骨を中心にして腰をでんと据えて坐る。上の方の力は抜き、腰に重点を集めてどっしりと坐る。これが基本であり無意識に姿勢管理ができるように教えて育てるのです。

今の子供たちの歩く姿は、夢も未来も躍動感も自尊心も宿っていない、まことに生気のない姿です。全身に神経が漲っていませんから、気が抜けているのです。デレデレしていてキリッとしたところがない

のは、身体と心との健全な有機的な関係がなかったからです。つまり節目を節目として対応することがなく、従って心身の程良い緊張感が無かったために、大切な自己調律機能が未成長となり判断不全をきたしているのです。

本来ならば常に希望を持ち、夢に情熱を掛け、自分の可能性を信じてやってみるものです。つまり一方向に意志決定をしたら、それに向かって突っ走るものです。少々の失敗も誹謗中傷なども、はね除ける意地と精神力も自然に育つものです。それが自立心です。その根本ができていないということになりますから危険なのです。

家庭も学校も、結局そうした必要要素を与えていないで、知識偏重の教育ですか、どうしても軟弱で未熟な精神構造になってしまうのです。それは散漫な精神状態を意味し、自分の好きな事と自分の都合の好いことしかしようとしなない、優柔不断で無責任・無関心人間になるのです。

その散漫度合いは、小学一年生にして既に学校の授業ができない状態であり、彼らを夢遊病症状候群にしているのです。ですからたかが姿勢一つと思って大切な時期を放任してしまうと、自己自身を健全にあらしめるための基礎機能が育たず、時と処と位置の認識も不完全となり、対応となると更におぼつかない状態になることを知っておくことです。

坐禅とは直接関係ない話しをしましたが、私たちの精神はかなり姿勢と密接な関係にあるということを知っておいて下さい。

今からまた心の問題に帰り、坐禅についてお話をします。

どんな本能であれ煩悩であれ、それが作用するのはこの今の一瞬です。今の心が千変万化し流転して人世を形成しているのです。いわば今の連続です。心は前後無く、今作用して消滅しているのです。何ものこっている物はないのです。記憶は単なる情報です。が、縁に従ってそれらが飛びだしてきて、複雑に知性と感性とが絡み合いイメージを形成して葛藤するのです。

つまり、本来の今がはっきりすれば、縁ばかりで何も無いという「空」の様子が分かります。今ばかりなのに、何故その事が釈然としないかという疑団が残るはずです。それは身と心が隔たっているから、総て相対的になり、人とも物とも隔たってしまうからです。従って隔たっている限り、その物自体には触れることが出来ません。それは真相が分からないということであり、分からないからああだろうかと、心をやりに発動させて迷いをわざわざ引き起こす元なのです。つまり煩悩の元は身と心の隔たりによるということです。

そうすると、迷いの元が隔てという心の癖であれば、その癖を解決すればよい。それが修行であり道だと言うことが分かります。その癖も今起こるので、今解決しなきゃ解決の時がないのです。総てのポイントが今この瞬間にしかないのです。禅の修行は今を明らかにする、そのためには今を離してはいけないということです。ここが禅修行の特徴であり、知性ではどうにも成らないところに難しさがあるのです。今は今だけで前後がない、従って知性が介入する余地がないのです。

何となれば、知を働かして今を知ろうとしても、その瞬間はもう終わっていて無いからです。

「今という今はなかりけり、まの時来ればいの時は去る」とあるでしょう。真実として「い」の時と「ま」の時は既に違うからです。

真実とはそれほど峻厳であり厳密なのです。微妙な時間差さえ寄せ付けない本当の「今」を追究するので、禅というものは難しいと思われています。知識や理屈が一切届かない、当然認識の世界ではない。ということは、真実の世界、本当の心とは言葉や概念の世界ではないということです。

そうすると人間的知性的な世界ではない世界をどうやって明らかにさせるかです。計らい事の心を用いなかっただけいいのです。どうやって心を用いないようにするかです。

「只」するしかないのです。これを只管（しかん）と言うのです。「只」あることが宇宙の中心であり普遍の真理です。つまりその物自体には理屈がないということです。

禅の本領、祖師方の境涯は「只ある」ということです。只歩く、只見る、只吸い、只吐く、只聞く、只たべる。つまり縁に応じ心の赴くまま、感情のままに「只」在る。

従って「只」は純粹であり、前後も自他もない。その物自体と言うことです。

聞くとは、電車の音も自動車の音も人の声も色々あるけれども、聞くそのものは音として総合的に耳に有るだけですから意味を有していないでしょう。意味を為さないから概念も言葉も無いでしょう。世界が個々に分離する前の一体同化状態なのです。

それでいて総てが鮮明によく分かるのです。その物自体になりますから、その物がその物の真相を教えてくれるからです。故に心を発動する手間も暇も必要がありませんから、煩惱・妄想・迷い・葛藤が起こらないのです。

と言うことは、音（眼耳鼻舌身意）と知性とは本来直接的な関係ではなく、それぞれ独立した作用であり、いわば世界が違うことがはっきりするからです。その時限りの単なる縁に対する作用に過ぎないと言うことです。つまり自己がない、空であるという確かな自覚です。隔てが取れたときに自覚すべき一大事因縁があるのです。

この確かな自覚、端的の消息を得た時が、真に仏法を体得したときです。でなければ真実を体得したこ

とには成らないのです。

「人々分上豊に具われりと雖も修せざるには現れず、証せざるには得ることなし」

とある通り、そのための修行です。

だから端的そのまま、只聞いて音その物になっておればよいのです。どこにも自己はなく、癖もないでしょう。これが只管功夫であり本当の修行です。要するに頭脳をそこに関係付けて認める、その癖を取る努力が修行です。心を用いないとはこの事です。[心意識の運転をやめ、念想観の測量をやめ]と道元禪師が注意を促されているところです。

さりとしてその様に言われても、それが最初からできるものではありません。心を用いない、頭脳と無関係にする最初のポイントを発見するまで骨が折れるのです。

少林窟に来られたことのない方々が、今の私の話をお聞きになっても、このあたりからちんぷんかんぷんになるんです。

概念のない世界だとか、聞くだけとか、知性と関係のない「只」の世界とか、自己を手放しにするとか言われても、その様子がさっぱり分からない筈です。

それは見たことも聞いたことも触れたこともないことだから、見当も付かないのです。

只、事実として知っておくべき事は、音は只耳ですから、音のままにしておくこと、耳の俛に「只」ある、総て任せて「只」在るのが道だと言うことです。

とにかく心を働かせて見たり聞いたりしなくていいと言うことです。バカと言われたらバカのまま、ほ一ほけきよならほ一ほけきよのまま、何遍聞いてもその時の一回限りで終わっているということです。前後が無くて今だけということです。

ですからこの大事な着眼点がはっきりすると、常時生活の俛が禅修行になるのです。

心静かにその物の俛に在る、縁のままその物のみの単にある。これが禅です。見聞覚知、一挙一動その物は嘘も本当もない、ありのままです。これを如来というのです。如来のままであればいいのです。本来の如来を体得するんですから、始めからいきなり如来に任せ、如来になっておれば、如来が如来の真相を教えてくれるのです。それで決着が付くのです。

ですから、皆さんは坐禅を苦しいもの、とてつもないものをやるんだと思わずに、ありのままに任せて「只」在ればいいんです。

耳のまま、目のまま、あるがまま。念を計り出さなければその物自体です。それが禅です。その物と一体になっておるのです。歩行は只歩行、一步一步只歩く。只管歩行です。これが歩行禅です。坐禅は只

坐禅。只坐る。思わんでももう坐っておるんですから坐に任せて只かくのごとくあればいいんです。これが只管打坐です。これが最上乘の修行です。目的と結果が一体です。これが仏の世界、普遍の世界、つまり涅槃なのです。彼岸とはこの事です。

今、それがそれですから、その他に目的が無いんですから思う用がないでしょう。だからどのような念でも、出たらぱっと捨てる。こうやって単を練るんです。只管を練るんです。作務の時は只管作務です。言うことも思うことも無いでしょう。

いかんせん常に知性を用い情報をやりくりする訓練をし続けたために、それ故にあらゆる思考系が構造として出来上がっています。いつでも即応するようになってます。気が付いたときには、その機能が勝手に動いちゃってるんです。

従って、そうした心の癖によって心身の隔たりを起こしてしまったのです。一度この見えない回路を破壊する必要があるのです。それで死に物狂いになって一呼吸、一呼吸、徹底やら無いと、心身の隙間が取れないのです。

それで今から坐禅をしていただきます。方法はいつも申し上げておりますように、雑念が出たら、即切るということが大事なんです。念を切る。呼吸で切る。腰を捻って切る。

これを繰り返し、繰り返しやるしかないんです。これが修行です。初期段階の禅修行の苦しいところです。それではこれから坐禅をしてもらいます。

第七回 普勧坐禅儀提唱

提唱を聞くときは耳に任せて只聞く。つまり知性を用いて聞くんじゃなしに、素直に只聞くことです。先般はこの普勧坐禅儀中、最も格調の高い名句、「所謂坐禅は習禅には非ず、唯是安楽の法門なり。菩提を究尽するの修証なり。公案現成羅籠未だ到らず。若しこの意を得ば竜の水を得るが如く虎の山によるに似たり。当に知るべし、正法自ら現前し、昏散先ず撲落することを」でした。本日はその続きに入ります。

「若し坐より起たば、徐徐として身を動かし、安祥として起つべし。卒暴なるべからず。嘗て観る超凡越聖、坐脱立亡も此の力に一任することを。況やまた指竿針鎚を拈ずるの転機、弘拳棒喝を挙するの証契も、未だ是れ思量分別の能く解する所に非ず。豈神通修証の能く知る所とせんや。」このあたりまで今日はいけるかなと思っております。

さて提唱ですが、「若し坐より起たば」。時至って坐より立つときは、そぞろに立ちなさい。坐禅は坐

禅です。故に自己はない、雑物が無い。坐禅そのものが本来真理の当体です。そのことを知るんですから、自分で思い計らう余地がない、是れが坐禅です。

だから坐禅が尊いのです。須く坐禅の如く真実にあらねばならぬ。立つのにも真実に立つ。身を動かすのにも真実に動かす。一言一句、一挙手一投足、皆真実ならぬものは無い。これを証明するのが坐禅の真髓であり真骨頂です。本来真実でないものはないのですが、真実と隔たっているのです、真実が無明になっているのです。ですから無明を破るために隙を与えないことです。本来いつでも用意なしに縁と一体です。本来隔てはないのです。わざわざ理屈を付けるために隔たるのです。

私たちは理屈無しに、その瞬間無為の働きで縁に即応しているのです。ドアに近づけば自ずからドアに手が行くようになっているのです。手は自ずから開けるように作用するし、開けたらすーっと出入りするよう機能が出来ているのです。構えも計算も段取りも無しにその時その場、用向きに応じて作用するようになっておるのです。本来このままで道なのです。これ以上何も無いのです。無我・無為の働き、つまり迷ったり間違ったりしたものは何も無い、解脱の働きなのです。なのに理屈を着けて隔てるから、その事が分からぬだけです。

素直であることが一番です。それを坐禅で学ぶのです。立つ時は、立つままに素直に準じるのが道なのです。誤って粗雑な振る舞いは決してするではないぞと言う親心です。

隙無しに徐々として身を動かしなさいと。この徐々という字は緩やかにという意味ですよ。ゆっくりと隙無しにと言う風を取ってください。

「安祥として起つべし」とある。安祥と言うのは、釈尊が坐より立つときの様子を現したものです。隙無く、優美に、神々しいばかりの姿を言うのです。法華経の方便品にその事が書かれているのだそうです。そのようにしなさい、釈尊に学びなさいと言うことです。

立つときの法は立つ事ですから、法に違わぬように注意深くすべきは当然です。端的これ真実です。これが如来です。これが仏法です。これが仏性です。只坐る、只立つ。これを行ずるのが修行です。何でも素直に只行ずる時、そのものと一体になり隔ての無いことが分かる。自我が取れるのです。そのためには真剣に隙なく只することです。常に端的を鍊るのです。努力の他に時節があるはずはないのです。

「卒暴なるべからず」。大法を尊び、謹んでよく注意しなさい。どうあっても卒暴にしてはならんぞと。修行者はいつでも隙を与えないことです。無自覚時間や精神の無自覚作用は、夢やうつや幻を生み出す本元です。言うなれば幽霊になる本元を解決するのです。そのためには間違っても卒暴にしてはならんぞと。頭真尾真、当体全是ならざる無し。粗暴は総てを失う元凶です。大いに謹むことです。

「嘗て観る」。古来より法を伝えられた祖師方は、みんな坐禅に拠って法を得たのだということを強調

しているのです。

「超凡越聖」。坐禅はとにかく凡も聖も超越しています。坐禅はそうであっても、人が有れば心も従ってあります。それゆえ凡聖が現れるのです。凡は六道のことです。地獄餓鬼畜生修羅人間天上と、隔てによって煩惱となり、惑乱葛藤して迷い苦しむ世界をその様に言い表したものです。つまり生死流転の苦界が六凡です。

隔てが取れて法に目覚めたのを聖と言うのです。これを声聞縁覚菩薩仏と四聖に分けています。端的ですから前後がありません。真空妙有ですから生死流転の苦界が存在しないのです。

どちらも心の世界であり様子ですから、坐禅用心記の冒頭にあるように、「心地を解明」すれば一切が明らかになるのです。坐禅は坐禅ですから、人にも心にも拘わりません。ですから坐禅は初めから凡聖を超越しているのです。坐禅ばかりの時、自己はないのです。身も心も無いのです。これを「超凡越聖」と言うのです。

勿論坐禅ばかりではありません。呼吸にしても歩行にしても、見聞覚知総て「超凡越聖」なのです。吐くは吐くしかないでしょう。一步は只一步でしょう。凡夫も聖人もないでしょう。だから真実そのものは凡も無く聖も無いのです。善も無く悪も無いのです。つまり一切を超越しておるのが真実なんです。ですから本当に坐禅したらいいのです。本当に一呼吸し、本当に一步したらよいのです。努力の結果、「超凡越聖」の端的に目覚めるのです。そうすると目に立つものが無くなり、自在の人となるのです。その力量は次の通りとなって働くのです。

「坐脱立亡も此の力に一任することを」。坐禅に抛って道を得た力の凄さを、古聖の例を取り上げて示し、人のことではない、みんなその存在だぞ、と言うて菩提心を喚起しているのです。

坐脱というのは坐ったまま死ぬことです。立亡というのは立って死ぬことです。坐脱の人は枚挙にいとまがない。四祖、五祖、六祖、我が高祖大師等もその人です。三祖大師は立亡です。行脚姿で自分が愛した大好きな丘の上の一本松にもたれて合掌したまま亡くなられた。我が国の祖師、関山国師も立忘されました。沢山居られます。出る息をぴしゃっと止めて出さない。解脱をした無我の信念の巨大さを実証しているのです。此の道の力が一切の煩惱妄想の元である隔てを取ってくれるのです。この道とは坐禅です。豈に坐臥にかかわらんやです。実参実究あるのみです。

自己なければ宇宙大の信念です。出す息を絶対に出さない力です。そのまま消滅です。生死自在です。ある祖師は、自分の死期を知り弟子に尋ねて曰く、「坐して死んだ者はおるか」と。「古来最も多し」と。「では立って死んだ者はおるか」と。「それも沢山おります」と。「じゃ、逆立ちして逝った者は」。「それはおられません」と。「ああそうか、じゃ、あわしは逆立ちで」といって逆立ちして逝っ

たのです。

間もなくそのお姉さんが帰ってきた。それを見て、「よいよこの子は子供の頃からひょうきんで悪戯者であったが、死ぬまで悪戯をして人を驚かすな」といって指で押して倒したということです。

これは生を本当にしておる者は、死も本当にできるということです。この力も一瞬、一瞬禅定を練ってきたあかつきの力です。平素隙なく禅定力を練っておれば、皆本来に目覚め、本来の力が湧いて来るぞと、希望熱を高め菩提心をそそっているのです。これ道元禅師一流の慈悲と知るや知らずや。「此の力に一任す」とは真箇の菩提心に拠って行き着くところです。

げに生死は一大事因縁であり避けられません。最も恐ろしい事であり悲しいことです。如何様に死にたいと願っても、なかなかその通りには行きません。総て因縁ですから、自然の俣が一番いいのですが、古来より自在底の人は生死を問題にしていませんから、自分で綺麗に始末を付けるのです。病気によってはそうはいかぬため、苦しみ三昧で逝く人も居ます。山岡鉄舟居士は癌でした。

腹はれて苦しき内に明けがらす

と詩って悠然と逝きました。苦しみ三昧に自己はない。只、「苦しい、苦しい」。或る祖師は、「この苦しみは汝等が遊戯すると同じじゃ」と言って苦しんで死んだ。あの巖頭は、首を刎ねられる時、「あ痛たたた！」と叫んで死んだ。是れを知った白隠禅師は、解脱底の祖師がそんなみっともないことをするなんてと、彼の境界を疑った。ある日、橋を渡っている時その疑団が溶けた。白隠禅師歓喜して欄干に飛び上がり、「巖頭まめだまめだ！」と叫んだ。当に巖頭の再来だったのです。天然にして自己のない真の様子が分かったのです。

とかく悟ればこうなるはずだというスタイルを想像し勝ちです。ところが越格の人は、機は俊敏にして目にも止まらず、深きこと無限、広きこと限り無しです。自己無き働きは、迷魂の人には解せない事柄なのです。それを無理往生に理屈を付けて納得しようとするから問題が起きるのです。自己を立て、己見を優先させていると法が入ってこないのです。

とにかく素直が一番です。無心ということです。何でも自己を捨てて淡々と、只するのです。いきなり「超凡越聖」底を錬ることです。

「況やまた」。しかる上になお、と下への注意を引いて、いよいよ本来の力量と道の凄まじさを知らしめようとされているのです。道元禅師は非常に知識の深い人です。古人を引き合いに出して具体的象徴的に訴え、祖師に感応道交せしめんと慈悲です。「指竿針鎚を拈ずるの転機」。指とはゆびですね。一指頭の禅で名高い俱胝禅師のことです。一生涯、指一本で片づけた祖師です。仏法とはなんぞやとき

ても、生とはなんぞやと問うても、何を尋ねても、只一指を立てるのみ。満身これ指です。どこにも隔てはない。自己なければ端的です。これほど真実を丸出しにした綺麗な答えはないでしょう。指を見ては駄目ですよ。指に自己無く隔て無きことを見てとらねば、道元禅師の了解を得ることは出来ませんよ。

指は指に非ずと知るや知らずや。只見るとき、指有りや又無しや。

試みに、「只」一指を立ててご覧なさい。指有りや、自己有りや、指無しや、自己無しやと参究するのです。どのように参究するか。指が指と言うか否か。自己と言うか否かを指に問うてみるのです。

竿の意味するものも祖師の消息です。釈尊の一粒種は迦葉尊者ですが、同じ弟子に阿難が居ました。十大弟子は皆一隻眼を具していましたので、当然阿難も大成を期して努力していましたが、世尊在世中には大悟する事が出来なかったのです。釈尊滅後、迦葉に参じて遂に大法の人となるのですが、その瞬間の経緯を物語る物がこの竿なのです。竿とは刹竿のことです。寺で法会のある時に立てる旗でありポールのことです。

迦葉が説法の因み、突然阿難尊者に向かって、「門前の刹竿を倒却し著せよ」と詰問した、その途端に大悟したのです。既に縁が純熟していたからその一言で時節が来たのです。日常の練りによるものです。

この竿には色々な出来事があるのです。馬祖下の南泉禅師と言えば趙州の師匠ですね。南泉に或る僧が尋ねた。「百尺竿頭如何が進歩せん」と。南泉曰く、「更に一步を進めよ」と。高い竿のてっぺんでは、そこでは前へ進むことができないのだがどうしたらいいのですかと、師匠を試すようなことを問うたのです。にべもなく南泉は「一步を進めよ」と。簡単な事じゃないか。そんな竿などに囚われておるから進むことも退くこともできんのだ。竿も忘れ手も忘れ自分を捨てみよ。さすれば一步を進めることができるぞ、とも何とも思わず、只「一步を進めよ」と言われたのです。そうしないと悟れないぞとの底意が有ったか無かったか。人々で良く見て取るべき事柄です。

古人による竿にまつわる凄まじい端的の様子を示して、仏法の容易でないことを教えているのです。

次は「針」に纏わる祖師の話です。龍樹のところへ不如密多が尋ねた時のことです。どちらも祖師です。龍樹菩薩は、遠来の客の道冲の疲れを労うべく、お水をいっぱい入れた鉢を持っていったのです。その時、不如密多は長旅で傷んだか、早速針を取り出して繕い物をし始めたところでした。片方の手は布を持ち、もう一方は針という八方ふさがりの状態です。突如目の前に、スッと水が現れた。喉の渇きもひとしおの不如密多は、何の躊躇もなく、その中へ針を投げ込んだのです。何と自在なことか。喜色満面、空いた手で早速鉢を受け取り、一気に飲み干したはずですが。ここは書かれていません。自己のな

い「只」の大きな働き、その徹底した自在さを龍樹が見逃さなかったのです。彼はそこまでやっておったかと、立派、立派というわけです。この鉢水と針との出会い、水も漏らさぬ機縁を「針水の縁」というのだそうです。これは禅門だけにしか使われないとときの出会いのことです。

また洞山大師が法友を尋ねたときの話しです。ちょうど僧密禅師が縫い物をしていたんです。見ればその事は分かります。分かっておるのに洞山大師は風無きに波を起すのです。何のために。只大法のためです。ここで凡聖無きに凡聖が現れるのです。

「甚麼をか作す」。尊公は今何を為さっているのですか。ととぼけて聞いたのです。これが一番怖いのです。分かりきったことをわざわざ尋ねるんです。ご飯食べておるときに今何をしておるのか。歩いておるときに今何をしておるのか。こうして分かりきったことを尋ねられたとき、油断をしていたら煩惱の虜になるのです。縁のままに、如法にあるか否かが現れるからです。

すると僧密禅師は「只」一言、「把針す」、縫い物をしておると。知らん顔して流すものだから、洞山大師がもう一步踏み込んで尋ねたのです。「把針の事、そもさん」、いったい針仕事って何んですかと。僧密禅師も尋ねる洞山大師の意を百も承知していますから、双方の間には何も無いのです。只是の如く在るだけです。僧密禅師は一言、「針針相い似たり」と。針は針にそっくりですなど。何処にも意は無い、感情も無い。縁のままに無心に「只」在る。凡聖を超越した境界に、流石の洞山大師も誉めざるを得なかった筈です。この麗しい法縁を見て取れよと、道元禅師が見せつけて下さっているのです。まだ続きます。

「鎚」とは、釈尊と文珠のあの白鎚のことです。ある日お釈迦さんが説法すべく壇上に上がっていかれました。「只」一步です。一步に自己は無い。壇上に上がった、それ自体がすべてです。

語り尽くして出ず東山の月。

松島や ああ松島や松島や。

何も言うことはないのです。他に法はないのです。釈尊がそういう法を口にする前に、智慧第一の文殊菩薩がすかさず、「法王の法はかくのごとし」と申し分のない結論を出してしまっ、鎚を打って終わりを宣言したのです。釈尊はそれ以上何も言うべき事はないので、壇より降りたのです。壇より降りられる釈尊、これも法王の法ですぞと、文珠が言いたげですね。この下りを「鎚」の一文字で現しているのです。それその物、それがそれであることが真理だから、他に知るべきものは何も無いぞと。その事を本当に知れよと言うことです。

「拈ずるの転機」。拈ずるの転機とは、これらの祖師の自在な働きのことを指しているのです。次も同じです。

「弘拳棒喝を拵するの証契も」。弘というのは、青原禪師と石頭大師の法縁の話です。六祖慧能大師は青原行思と南嶽懷讓の二神足を世に打ち出しました。その青原禪師に石頭が始めて参じた出会いの様子と、違う事例として百丈懷海禪師が馬祖道一禪師に再参した時、やはり弘子を立てて大問答した。このやり取りが本当に分かれればよいのだぞと、後世の修行者に出題して努力を啓蒙しているのです。

さて、青原禪師が石頭に尋ねるんです。「汝何れよりか来る」と。頭曰く、「曹谿より来る」。曹谿山は六祖が住んでおられた山、その一帯を言うのです。それを聞いた祖は、何も言わずに弘子を、「只」ついと立てたのです。石頭の解答がごく当たり前だったので、凡か聖か、それを適格に見極めはつきりさせる手法です。頭が威風堂々としておるし、自信をもっておるから、これはひよっとしたらひよっとだぞ、と言うわけで更なる点検をするのです。これが分かるかと。選抜試験です。口頭試問なら口で言うのですけれども、そうじゃない。「只」指を立てるのと同じように、「只」弘子を立てただけです。

弘子についての話がもう一つ。馬祖道一禪師と百丈懷海禪師です。六祖下の南嶽懷讓禪師、その弟子が馬祖道一禪師、その弟子の一人が百丈懷海禪師です。南嶽禪師と青原大師とは兄弟弟子ですから、百丈禪師は青原大師の甥に当たり石頭大師とは世間で言う従兄弟の関係です。とにかく馬祖禪師は支那に禅の黄金時代をもたらせた大御所です。何しろ八十四人の善知識を打出したのですから大変な禪師です。その内の百丈懷海禪師と南泉普願禪師は越格の祖師として特に有名です。百丈下には黄檗希運を筆頭に多数祖師が生まれました。その黄檗下に臨濟義玄ほか多くの英傑が排出してくるのです。また南泉下にはあの趙州從シ禪師や長沙景岑禪師等の豪傑が居並ぶのです。

さてその馬祖大師と百丈禪師の話です。師匠と弟子が用向きで出かけた因み、河にさしかかったその時、足下から鴨らしき鳥が飛び立った。祖曰く、「何れに向かってか飛び去る」と丈を試みた。曰く、「飛び去る」。祖曰く、「此処に居るではないか」と言って、丈の鼻を千切れんばかりに捻り上げた。「あ痛たたた！」と忍痛の声を発したその時、「何ぞかつて飛び去らん」どうして飛んでいかなかったのじゃ！（飛び去ると言うだけ隔たっているではないか。自己がなかったらその物だぞ）と言われた途端に自己を忘れて決着が付いたのです。如何にも馬大師らしい活作略です。彼はやったとばかり喜んだ。拘りが溶けて落ちのだから、楽になり歓喜したのは当然である。自信満々で師から離れたのだが、日常が悟りの通りにさらさらとは行かない。悟りの光が邪魔をして、淡々と行かなかったのだ。その事に気が付いて再参したのです。此処が大切なところです。

祖と顔をあわせるや、祖は弘子を握って、「これ何ぞ」とも何とも言わずに「只」示した。丈は、「弘子を使ったり、弘子を離したりする。（それぞれの物じゃないですか、それがどうかしたのですか）」と

言った。すると祖は、その事が分かっていたら言うことは何もないから、只払子を元の処へ掛けた。その事も分かる丈なので、突っ立ったまま、言うことは何もありませんぞ、とも思わず只立っていた。払子の拈起と同か別かと参究するのが道人です。

やおら祖が言うに、「お前は今後口の先でどのようにして人を導くのじゃな」と鋭い正拳を突きだした。すると丈は、さっきの師匠の払子を取って立った。それを見た祖は、百丈が言ったとおり「払子を使ったり、払子を離したりする」と言って丈に成り切った。丈は祖に成り切って払子を元に返した。その時、祖が大喝一声、「喝！」とやった。この一喝を喰らって、丈は三日耳聾したとある。真箇自己を剿絶し大成したのです。ここであの百丈禅師が出来上がったのです。まさに師匠のお陰です。

「拳」とはこぶしです。指や払子と同様に拳を「只」立ててみせる。黄檗も雪峰もやった。その物によって自己のないことを明らかにさせてやろうとしているのです。

黄檗禅師が説法するとき、拳をぴやっと立てて曰く、「天下の老和尚、総て這裏にあり」。天下の老和尚とは、大修行底も祖師方もと言うことです。総て俺のこの拳の中にあるんだ、と言ってその真意を探求させるのです。

試みに拳頭を立ててご覧なさい。これは是か、これ非か。拳が自ら拳と言うか。畢竟これ何ぞ！何も言うことはないでしょう。本来このままです。なのに疑義の念が起こるでしょう。それは拳の真相が明確になっていないからです。真相とは、何も無い消息のことです。無我の拳頭には、仏も天魔鬼人も手が付かないんです。この勢い、この自信力、この純粹さ、この働き、この限りない大きさ。これが仏法ですよ、これが解脱の力ですよ。

「棒」は例の徳山です。茶屋の婆々にやられて直に龍潭禅師の元へ走り、燈吹滅で悟っただけに力が強い。「言い得るも三十棒、言い得ざるも三十棒」とて、何と行ってきてもぶん殴って心の悪癖を取る活手段です。その棒のことです。つまり徳山が殺活自在の力量底をよく見てみる、と言いつつ、そう成るためには尋常の修行ではないぞと、心を究めることの容易でないことを言っているのです。

「喝」は臨濟禅師が代表です。仏法を尋ねても、「喝！」、門へ入るや否や、「喝！」とやって煩惱を砕くんです。この一喝も、天龍・俱胝の一指も、青原の拳頭も、馬祖・百丈の払子も、徳山の棒も皆同じなんです。こういう祖師がたの活作略が衆生済度そのものなのです。その働き振りを、「拳す」と言い「証契」と言うたのです。払拳棒喝等を自由に使い尽くすことを指しているのです。

要するにその物になって自己がない、その事を確かに体得せよと言う事なのです。そのためには、命がけで正修行するしかないぞと言うわけです。その物に成り切って自己を忘れることです。自己が無けれ

ば総てと同化するのです。方法に証せられるのはその時です。これを「証契」というたのです。仏が仏を証明したと言うことです。当然の事ながら、

「未だ是れ思量分別の能く解する所に非ず」です。この自在な働きは、知恵や思慮分別など、知性を使い概念を駆使しての思考上の世界ではない。全く別世界だぞと言うことです。運水搬柴は特別のことではない、けれどもその物に徹して跡形がない消息となると、運水搬柴は奇特の事であり宇宙総随來也です。もうとても情識などで伺い知ることのできる世界ではないし、手の届く代物とちがうんだぞと。

「豈に神通修証の能く知る所とせんや」です。神通力というのは天を駆けめぐったり、水を燃やしてみたり、網代傘を川に浮かべてそれに乗って河を渡ったりすることです。そういう風な天地自然の因果を背無して勝手なことをすることを神通力と言うでしょう。しかし、そんなものは「証契」の世界からすれば問題にはならんのです。例え水を燃やし天を駆けめぐることが出来たにせよ、隔てがある限り煩惱妄想の虜から解放されることはなく、永遠に苦しみ続けるしかないのです。だからそんな奇妙なことを本気になって尊ぶことはしてはならないのです。怪力神通を願うは、正しい精神でない証拠なのです。ここで言う「修証」とは修行して悟るんだとか、これが修行だとか、これが悟りだとか、まだまだそういう風に自己を立てている連中にはとても分かる世界ではないと言うことです。

心意識の運転をやめ、念想観の測量をやめて、「只」ひたすら打坐に徹しなさい。本当に歩きなさい、一步に徹しなさい、日々を真実に行きなさいということ言ってるんです。思慮分別も無く、凡聖も無く、神通修証も無く、本来一切を超越した世界が坐であり一呼吸であり一步です。この一日を正しくよく行きなさい、他のことをするんじゃないんだということなんです。

祖師方のこういう故事を沢山出して見せると、とんでもなく難しいように思うかもしれませんが、本来の道、つまり「只」を中心にすれば皆同じです。今此の瞬間を見失うことなく、只やりなさいということですよ。これが、豈に神通修証の能く知る所とせんやです。一切関係ないのが本来の今ですから。余りに近くて純粹で単純だから、寧ろ他に気を取られてしまうのです。怪力神通や思慮分別の如きものに尊いものを期待してしまうのです。

隔てが取れて真相がはっきりしていない限り、心にそういう落とし穴が出来てしまうのです。叱咤激励をして道を道たらしめようとの慈悲落草です。次も同じです。

「声色の外の威儀たるべし」の声色とは、六塵とも六境ともいわれておるもので見聞覚知、つまり眼耳鼻舌身意、色声香味触法のことです。これらは本来大切な光なのですが、隔てがあるとそれを認めて相対化するので執われになる。つまり煩惱となるのです。いわば迷いを引き起こす刺激となるのです。隔

たりがなければその物自体ですから、光明であり本来です。本来は声色のまま自己がないので成仏しているのです。隔てがなければ、それが光明ですから声色が無くなるのです。当然ながら煩惱は菩提であり迷妄が無いのです。これを「声色の外の威儀たるべし」と言われたのです。私達が元よりその人だと言うことです。仏の真骨頂を早く知れよと言うことです。

只真実にやりなさい、真実に見、真実に聞き、真実に思い、真実に生活をしなさい。その一番の早道が只管打坐だと言うことを、言葉を換え例えを出して促されているのです。

身に為すことなく、心に思う用の無いようにして一心不乱に坐禅をしてごらんください。そうすると身と心とが一つになって自ずから隔てが取れるのです。隔てが取れたら皆道であることが分かるのですと、こうお示しになっているのです。

一番肝心なことは、ご自身の一刹那に参することです。これが生きた修行であり生きた読経です。食事でも徐にやってください。ただ命を長らえるために食するだけのものは単なる食事、餌です。ところがいかに真実にやるかということになると、この動き自体が神通修証の能く知る所とせんや、声色の外の威儀となるのです。そのこと自体が手段じゃなく、結果であり脱落の働きと言うことが分かってくるのです。癖が取れて心が飛び歩かなくなると、その事がはっきりするのです。

そうやって日常全体、徹底成り切り成り切りするのです。余物を混入することなく、成り切り成り切りの連続をやるのです。ドアを開けるとき、トツテに手が行く。その事実を淡々と見守るのです。念を加えずに「只」するのです。トツテを捕まえたら「只」捻って「只」引っ張る。この「只」の事実をどこまでも錬っていくのです。

本来総て道ですけれども、隔たりがあるため上滑りしておるのです。道でありながら道を見失っているのです。道を道たらしめて本来に戻す、これが修行です。つまり改めてもう一回、元に戻すのです。必ず道が道を教えてくれます。常の自分が始めから道であること。この事が分かった時、是れで良いんだという決着が付き安心するのです。

只々研鑽を怠りなくやることです。そのためには最小限の緊張感を絶えず持って生活することです。そうしなければ道を見失うからです。とにかく着眼が何より大切ですから、しっかり坐禅して下さい。坐禅が一番です。では今日はここまでにしておきます。

茶話会

老師：一寸余談から入ります。今、とにかく地球規模で気になることは教育問題です。先進諸国の環境は、もはや子供の心を健全に育む状態ではない。そんな状況にあることを忘れないで下さい。

何故自然の環境が無かったら人間の精神は人間らしくならないか、ここに疑問を抱いて頂きたいのです。

自然を失うと最も怖いのは、母親に大切な子育て情報としての育児本能が発動しないことです。育児本能は種を継承する上で最も強烈にして精細に働く天然の叡知なのです。男性主体の戦争も、元は種の保存本能に基づいて起こってくる生物本来のものです。滅ぼされる危機感が、防御と攻撃という作用になってしまうのです。それほど種を継承していくためには強烈な本能が必要なのです。

男性のそうした荒々しい動物的な本能は、環境が荒めば荒むほどその刺激によって巨大化し残忍になっていくのです。防御と攻撃によって種を守るという事だけから言えば、環境悪化の刺激は寧ろその本能を全うすることですから良いこととも言えます。しかし、残忍になり無知性になることは、自滅することでもあるのです。従ってあらゆる環境は良質化へと向かい、安定化するようにしなければとんでもなく危険なのです。

又その様な平和で安らかな理想環境に成ればなつたで、人間の精神はスリルを求めサスペンスを要求するようになるのです。その理由は、人間そのものが本質的には生物であり動物ですから、どうしてもある程度の刺激が必要なのです。挑戦し向かっていく対象が必要なのです。

そこで健全な社会とは適度なギャンブル性も必要であり、各種の賭事とか遊びが存在し、格闘技からスポーツなど、大きくとらえて言えば心身を刺激する文化が不可欠なのです。そうした文化に触れることで、刺激や興奮を得て知性的感情的な快感や満足感を獲得しているのです。それが例え疑似体験としても、確かに身体的精神的に大きく影響を与えているのです。

これを徹底排除してしまうと、大抵の人は内的処理が就かず、やがて一人々々の心は要求不満が飽和状態になるのです。そうしますと、陰でそうした刺激を求めるようになるために、期せずして不穏当な商売人が暗躍することになるのです。待つてましたとばかり要求が要求を刺激して無秩序な風俗営業が、寧ろ当然のように安定的に流行ることになるのです。

ここで人間の徳性が大きく問われるのです。人格の大切さ、人間として真の自律が如何に重要であるかを、もっと真摯に自覚すべきです。これは全ての教育の最上位に位置づけるべき事であり、同時に最優先して取り組まねば大変なことになる重要課題なのです。これが教育の基本目的なのです。このことは性差に関係なく、人間の条件として培い向上を図らねばならないことです。

女性の自然さには又異なった要素があって、男性とは一寸様子も異なる重大な問題があります。勿論個人差は大きく、決して決定的なことではありません。只傾向としてその様になり勝ちだと言うことで

す。

妊娠すると、女性の身体は新しい命のために整えられていきます。総ての骨が可動性を持ち、それに因んで身体全体が弛緩傾向になるのもその一つです。精神性も次第に母性本能に比重が移り、抽象的な思考や忽ち直接的でない事柄などからは意識が遠のいていくのです。危なげな弱く弱い赤ちゃんに合わせて、優しくふんわりとした、しかも極めて近視眼的現実的に心が働くようになっていくのです。これが種を育むために獲得した自然の智恵なのです。これがオーソドックスな姿であり、母性本能の健全な姿です。子育て本能は本能の中でももっとも美しく強烈なものです。子供のためだったら命をも省みることなく、血相を変えて守ろうとする働きです。

ところが今日のような人工環境の中で育つと、そうした自然の生理的営みが阻害されてしまうために、豊かに備わっている自然の智恵、即ち子育て叡知の元である本能が発露しなくなっているのです。この事が怖いと言ったのです。

本来妊娠出産は自然の作用であり、素直に自然に任せておくことで生理的な変動がスムーズに働き、それが元で大切な本能が順序よく花開いていくのです。

特に成長期にある子供は、大地から離れ自然から遊離してはいけないということです。自然との関わりを失った生活をする、生理的にも精神的にも本来の天然の機能が円滑に発達しないのです。それはこの自然の中で何十億年も掛かって生命進化を繰り返して発達したもので、人類に達することが出来たのは、総てこの自然に拠ってのみ可能だったのです。又総ての種が存在し継続することが出来るのも、この自然の中だけです。

単に身体を構成している物質や生命を営む食材が自然に依存しているというだけではなく、直接自然と関わっていなければ総ての機能が健全に成長発達しないのです。分かりやすく言えば、自然から離れた瞬間から天然の機能は退化し、何世代かで空中分解的に衰退し、法的にも行政的にも手が着けられなくなるのです。そして社会として機能しなくなり修羅場となり滅んでしまうのです。

現代は有効な自然が希薄になっただけではなく、不必要で過激な刺激が蔓延した日常です。だからそれらによって知らず知らず、知性と感性と意志のバランスを崩されてしまい、精神は常に不安定に成らざるを得なくなったのです。常にモヤッとした不安や不信感や不満が心を塞ぎ、自信喪失を来たしているのです。これが全体危険の始まりなのです。

我々の精神は色々な事柄に接して、勿論歓喜することもあります、思い悩むことも腹立たしさに感情を動揺させることもあります。しかし同時にそうした心を浄化安定する機能もちゃんと備えた存在なのです。本来の機能は素晴らしいのです。それは明るい夢や健康的な希望を抱くことで、過去への拘りを切り、無限大の可能性のある未来へ熱い思いを馳せるという機能です。これが素晴らしいのです。一変に心が明るくなり軽くなるのです。これが本来備わっている浄化安定機能なのです。

ところがこの大切な自己防衛機能である精神浄化安定機能の成長を、早くから阻害し萎縮させてしまっているのです。この自己破壊的な精神状態を解消し救ってくれるのは、やはり自然しかないのです。

小さい頃より自然その物に親しく接することです。そして色々な事に興味を持つことです。また木登りとか走りっことか相撲などをして、仲間と健全に競い合い刺激し合い、身体をフルに機能させることです。それらを通して躍動し、爽快感を得、達成感を得、感動を得ることが大切なのです。

この時、心は過去の引きづりはなく、軽快感や躍動感が常に「未来を希望の世界」として意識していますから、夢と希望で何かにつけてわくわくしているのです。これが自然の成長の様子でありリズムです。ひずみのない清々しい精神と言うことです。これが精神の浄化作用であり安定作用なのです。日に何度もこれを味わい感じて育たなければ、精神の防衛機能は発達しないのです。この機能によって精神の安定を得ることができ、負の作用から救われるのです。

即ち、知性感性意志の一体化、つまりは身と心の渾然一体こそが、最も安定していて、最も自然で健全なのです。ですから成長期には、この状態を最も大切に教育をし、生活しなければならないのです。

自然の中で躍動するということは、人間動物として身体的機能をフルに発揮するということです。従って本来的に内在している野生性と言いますか、動物としての本能も、天然の発露として素直に顕れてきます。それが子供らしい子供なのです。これが成長のために必要なのです。命の尊さを知るためには命に触れることがなければ成りません。子供が命に触れるということは、本能的に他の動物などを追っかけ回し、捕獲することであり、飼うことであり、連れ回したり抱いたり、時には虐めたり殺したりすることなのです。

そうした触れ合いによって感性が刺激され、無意識に残虐な殺し方をしたその事に対して、可愛そうなことをしたと、始めて人間的に魂の疼きを覚えるのです。自律の本になるもの、それはこうして意識・無意識に実体験して得た経験知に有るのです。それが魂の中で疼き、そして叫ぶから制止力となり自律

となるのです。

真に成長を遂げるためには、特に動物としての本能的な凶暴性や残忍性は、早く発露させ脱皮させなければ成りません。弱肉強食の本能は、自然界で生きる者の宿命であり、無意識に機能するものです。それを自覚にまで高めなければ本当の人間には成れないのです。その大切な自覚をもたらせるためには、自然界の中で最小限の経験によって次の成長を促し、それらを脱皮していくのです。それが自然のリズムの流れであり、自然の成長なのです。

悪戯も残忍性も動物的闘争心も攻撃性も盗癖性も、成長段階の一過程として顕れますが、健全な成長は当然魂も育てますから自然に乗り越えて、人格形成へと成長していくのです。本来の理性と豊かな霊性ある存在へと成長するためには、止むを得ない必要悪でもあるのです。

無経験故にそうした本能を脱皮することなく大きくなった人間は、危険な動物の性を内に持っていますから大変危険なのです。子供が虫を踏み殺すように簡単に人の命を奪うという精神構造は、尚未だ畜生動物の域を脱していないが故なのです。例え人間の言葉を話し、外見的には確かな人間であったとしても、魂に関する領域が人間に達していなければ、人間界に生まれるのが早すぎたと言うべきでしょうか。

ですから如何に健全な成長が大切かと言うことです。自然の中で仲間と遊んでさえ居れば自然発生的に子供社会が出来、彼らなりのルールも生まれ、知恵を出し合い一層躍動感を求めて野山を駆けめぐるのです。子供社会が健全に機能するためにはどうしても豊かな自然が必要であり、好きなだけ悪戯が出来る環境が要るのです。自然は実に上手くしたもので、四季折々の変化は子供達を決して飽かすことなく、新鮮な感覚と感動を与えるのです。常に何か好いことが起こりそうな予感に胸を膨らませています。それが本来の子供の心です。そして全身の機能を使って遊ぶのです。子供達は遊びによって心身を発達させ、遊びから多くを学んでいくものです。

こうした環境で育つと、精神的にも肉体的にも自然が隅々に浸透して、ゆとりと潤いをもたらせます。自然はこちらが踏め込めば踏み込むほど深く大きく抱いてくれるので、理屈ではない面白さと物の道理や関係、そして美しさを教えてくれるのです。ですから忍耐も努力も諦めも、闘志も反省も妥協も、何れもが全体の関係と言うかバランスの取れた、弾力の効いた切れの良い成長をもたらせてくれます。

ここに於いて自律性も自発力もが育ち、責任感も倫理観の基本も備わるのです。これが自然の偉大な浄化作用と教育力です。これは学校という場では絶対に学ぶことが出来ない大切な事柄なのです。

勿論先生や親による教育は大切です。道理を知り、考え方としての理念は大切です。分を知り弁えになる元だからです。しかし、子供は動物的要素がまだ濃厚であり、機能の発達は取り分け大切なのです。順序としては体の機能が優先して、より健全な成長しつつその上でもたらされていく知的教育が本当なのです。人による教育は教える側と教わる側との関係から成り立っていて、多くの場合、言葉と文字を基本としています。

これらは総て知性で処理する情報ですから、知識量は当然増大します。勿論これらも重要です。だが、これに費やす時間が長ければ長いほど、体と心の遊離時間が長くなり、そのために成長のリズム自体を狂わせてしまうのです。自然のリズムで躍動してこそ、知性感性意志の三位が統一し、それによって健全な成長があるのです。

言葉と文字だけで思考系を刺激し続ける場合、知的興味と面白みや満足感をもたらすだけの力量のある先生ならいざ知らず、面白くもなくいやいやでも、当の本人は従うしかないので。気持ちは白けてしまうし、頑張らねばいけないから無理にもしようとする意志が働きます。その上、どうしても理解することが出来なかつたり間違いが続けば、もうどうでもいいやと諦め意識が台頭してしまい、実に厄介なことになるのです。ですから三位の遊離は、即精神の不安定状態を意味するのです。この状態が一番危険なのです。

精神の大切な統一性を破壊し続けると、三位のバラケがひどくなって仮想の分裂症状をきたし、互いに相殺し合う関係になるのです。そこから精神状態は次第に悪化していくばかりです。ノイローゼになる絶対条件がこれです。逆に三位の遊離がない限り、絶対にノイローゼには成らないのです。自然の作用である精神の浄化機能がちゃんとしてくれるからです。

その子の異常状態を発見した時には、既に強度の三位分裂症候群に陥っています。発刺とした子供らしい躍動感をもたらせる自然の機能がかなり以前より退化しているからです。そうすると精神の浄化機能・安定調律機能が発達しませんから、自律性の根底が阻害されたまま大きくなってしまいます。このような内的破壊を起こした子供の状態など、一般の親や教師に分かる筈もなく、況や分かったとしても、普通の親や教師に出来る根本的な改善策は何もないのです。

そんな子供は毎日戦々恐々とした気持ちを携えていますから、ちょっとした一言で死ぬほど傷ついたり、それが動機で拒食症や過食症になったり、感情爆発による事件を起こしたりするのです。

そんな不安定状態にある感情というものは、直情しますからとても危険なのです。その衝動力は生命力と直結していて、極めて動物的ですから直ぐに獰猛化するのです。子供は不安定で苛つく心を紛らわせるべく、重ったるい自分を吐き出し、片時でも忘れようとして馬鹿なことをするのです。

諸問題を起こす今の子供達の原因はこれなのです。こうした背景で殺傷事件が起こり、且つ続発していくのです。まだまだ何が起こるか分かりません。これが今の時代性で傷ついた子供達の現実なのです。自然から遊離し、自然のリズムを壊していることも知らないで、やたら知性にばかり向かっている今の教育が如何に危険であるか。現在の教育が根本的に子供を駄目しているのです。

斯くして育った今の若い親は、子供を産むことは出来ても育てることが既に出来なくなっている、その理由が分かってもらえたでしょうか。

こういう親に育てられるのですから、この世に生を受けたとたん、その子は過酷な人生が始まるとすれば、甚だ気の毒なことです。

赤ちゃんは環境に慣れていくまでには一年以上かかるのです。それまではできるだけ安全で、何の恐怖も心配も悲しみも感じなくてすむ静かな生活が必要です。初期は身体で感じたまま反応します。知性以前の本能作用ですから、まさに動物的であり直覚直感で総てです。

ですから急激にぱっと抱き上げたり、さっと下ろしたり、耳元で大声を出したり、どンドンといった強烈な振動などを与えますと、恐怖のため全身が逡巡して身構えてしまいます。それは動物本能の危機感に襲われるためです。これに準ずる刺激を無神経に与え続けると、危機本能を刺激して精神構造の根元に組み込まれてしまいます。組み込まれたら最後、知性や意識や感性の根底に存在して折々に顔を出すのです。これは自分の意識以前に作動する厄介なものです。呻吟しやすくびくびくして自信がもてず、人を信じるより疑う事が強く、そのため不安定な精神になりやすいのはそのためです。

最初にやり損ねてしまうと、一生おどおどした心を引きずって生きることになるということです。だから人間という最も高度に発達した生物は、その完成域に達するまでの道のりが長く精細なので、発露していく手順と踏むべき要素をちゃんと踏んで経過しなければならないのです。

人間として成長発達する自然のリズムを大切にすることです。つまり動物としての健全な機能を先ず備えることです。それが元になってちゃんとした女性に成長するのです。そして始めて子供を産み育てる

のに必要な本能が機能するのです。さすれば出産は自然に安産であり、しっかりした母性本能が働き、育児本能も自然に発露するので、赤ちゃんの様子が悉く感知できるし対応力に事欠かないのです。今日のように発達した子育てのための多彩で便利な文明に目を奪われることなく、本来のシンプルで簡潔な智慧が、赤ちゃんを健全に育ててくれるのです。迷うことも苦しむこともなく、毎日新鮮で楽しい育児を満喫しつつ、母としての更なる自覚と使命感が湧いてくる状態でなければ本当の母性ではないのです。子育ては本当に楽しいものです。苦勞が少しも苦勞ではありません。

健全な母性であれば、ですからちゃんと成長に合わせて必要な叡知が自然に現れ教えてくれますので、妙に知性でいじくり回す事をしなくて済むのです。自ずから分かるからです。

主人が「わっ！」と大きな声で接したなら、「あなたそんな大きな声を立てたら子供が驚くし、精神的に恐れを抱く子供になりますよ。私達の大切な子でしょう。優しくお願いしますね」と言った注意が自ずから飛び出してきます。

確かな本来の母性が、光に対しても、音にしても、速度にしても、食事にしても、温度にしても、入浴に関しても、排泄にしても、赤ちゃんの一番適正を感知して対応してくれます。天然の優れた英知に基づいて子供に接していけば自然な子供の成長があるんです。育児の醍醐味は、主人とともに味わい感動すべきです。

今、頻繁に虐待事件が起こっていますが、自然環境の破壊と知識偏重教育によって、心がずたずたになった結果です。心と身体のバランスが決定的に崩れ、自分を健全な人間として保つための、最も大切な精神要素が根底から阻害されて育ったからです。全く自信もなければ自律性も尊厳性も育たなかったからです。ですから育児が満足に出来ないばかりでなく、対人関係も表面だけならともかく、まともに通常の付き合いは出来ない精神構造なのです。

従って夫婦間も家族間も人間性が欠如していますから自己中心となり、夫婦であり親としての自覚も責任感も希薄なのです。ちょっとしたことが元で直ぐ離婚に至るのは、何とも情けないながら心身両面の幼稚性による人格不全と言うことです。その本は、やはり自然と遊離し、自然のリズムとバランスを失ったまま成長したからです。結果、母性が健全に発達せず、従って育児本能が機能しないのです。そんな新米ママさんは、仕方無しに育児書に頼らざるを得ず、二十四時間、本に追われる育児となるのです。当座とにかく書かれていることを理解するために知性は全開状態です。次々に起こる分からない現象に挑むとなれば、極限的な意識で臨むことになり、自然に余裕がなくなるのです。

それでは疲れるばかりです。我が子可愛さより次第に重圧感へと転じ、日夜のない、終点の見えない世

話事だと思い始めると急に疲れてしまい、面倒が嫌悪に、そして憎しみにまで愚劣化するのです。赤ちゃんや子供の虐待は、こうした身体的疲労と心的疲労が背景にあって起こるのです。

一方表面上では高学歴の時代を迎えました。一面の批判精神は攻撃的であり、理解できない事象などに対しては、存在さえも否定するほど自己中心になっています。本による勝手な解釈は、次第に飼育的となり、妙な可愛がり方はペット的となり、逆にペットが人間的扱いになり、畜生と人間との境が分からない育児感覚になるのです。これも後に大問題を引き起こすのです。

何れにしても内なる開けと発露による本来の力に勝るものはなく、外部から取り入れた借り物の知識とは雲泥の差があるのです。このことは成長に伴って更なる格差となり、子供は子供で甚だしく傷つき、親は親で訳が分からなくなって苦悶し続けるのです。早くもここで既にすれ違いを起こしていますから、子供の智恵が進むにつれて親子関係がぎくしゃくしてくるのです。

勿論今の若いお母さん達が総てそうなると言っているのではありません。そのような若い母親が多い理由がこれだと言うことです。また原因は複合的なもので、核家族化も大きな理由であり、総ての変動速度が激しくて就いていけなくなったことも、価値観の多様化で何が本当かそうでないか、必要か無用かが分からなくなったことも、主人が殆ど家庭に居ないため相談が出来ないことなども、この時代とは言え悲劇的な理由なのです。それらが全部子供達に直接関わるので考えさせられます。

この事を本当に解決出来るか否かが、次世代を健全に育てることが出来るか否かを決定するのです。ただ理由が何にせよ、我が子を不幸にさせたくないのは共通した願いです。従って少しでも根源的に赤ちゃんとの成長との関係を理解して、無理のない健全な成長を促すための努力は、決して惜しむべきではないでしょう。

自然の働きには、気持ちが悪くて泣くはずはありません。泣くには泣く理由があると言うことです。その理由を素早く察知するには、知性よりも寧ろ母性本能による直感の方が早くて楽で適格なのです。母性の直感に素直に従って行為していけば、赤ちゃんの折り自分も嘗てそうして親に訴えてきた過去の知らざる経験が蘇り、泣いているその理由がちゃんと感じ取れるし分かるようになるのです。ですから母性を信じ素直にそれに従えば、何も構えて力んだりすることはないのです。勿論経験知は回数を重ねるたびに精細になっていきますが、基本は母性本能による直感です。ちゃんとした成長をしていれば、赤ちゃんが言葉を用いないだけ、全身が神経になり知性になっていきます。それが母性の素晴らしい直感

であり叡知というものです。

これを非科学的とか非理性的だと言う者は、本当の母性、本当の父性に目覚めていない未熟故の無知性だからです。何十億年の間、淘汰し尽くして出来上がった母性本能が、本当に非科学的で当てにならない機能であったなら、人類も他の動物も次世代を育てられず、とっくに地球から消滅しています。こんな明快な事実在即した道理が分からないのですから、哀れむべき輩ということです。そのような人の言葉に迷よわされしないで毅然として育てて下さい。今時の不健全な成長をした知性よりも、母性本能による育児機能の方が遙かに完全であり安全なのです。

嘗ての若い母親はみんなこうして母性本能の直感による経験知で育ててきたのです。誉めるのも叱るのも訓育するのも、総て母性から滲み出る魂に従って教育したのです。そこには迷いも躊躇もなく、心から吐露する自信と迫力があり、生の生命力がそのまま伝わったのです。だから自律の利いた人間になったのです。親や子供のためにも、恋する人のためにも、国家のためにも、天皇のためにも、自尊心や信念のためにも潔く死ぬことが出来る精神力を宿していたのです。

今の子供達はしてはならないことも分からず、分かっても守れず、しなければならないことも分からず、分かっても出来ず、自信も無く自律性も育ておらず、どこまでも自己中心的です。若くして気高い理想も夢も持ち得ない人間になっているでしょう。根本が育っていないからです。本当に困ったことだし危険なことなのです。

しかも家庭での会話は内容も品性もなく、また子供が成長し自律するためにどうしても必要とする教養的なものは全く無い状態です。言葉と態度は親から学びますので、できるだけ美しい言葉、美しい概念、そして美しい思考系になるような言葉遣いや話し方が大切なのです。こうして少しでも教養に心がける努力も、美しい愛情なのです。母性が確かであれば、豊かな愛情が必ずその様に成って発露するのです。

不健全成長故に父性も母性も不全となり、教養意識が働かないのです。どうしても常に批判的となり、恨みがましくなり、世間のつまらぬうわさ話ばかりを、しかも露骨にするようになるのです。勿論親の話が総て分かるものではありませんが、意識の方向付けには充分です。親の気性や性格が子供に似るのは先天性ばかりではなく、こうして染み込んで出来る部分が大きいのです。最初の段階を大事に育てなければ、後で色々な教育を施しても根本は改善され難いのです。

それまでの育ちが如何にあらうとも、やがて自発性が芽吹く時期が来ます。第一時期は女の子の方が早いようです。母親が自分のことを放っておいて真剣に化粧をすれば、子供にはその母親の背中が「こっちをよく見なさい、このようにするのですよ」というサインなのです。真似るのは先ずお化粧からです。これが自発の始まりです。

従って学習は真似から始まるので、危険な物は手近なところへ決して置かないことです。例えば髪を解く仕草を真似ますが、子供は櫛を知りません。そののらしい物を握って頭を撫でますから、剃刀などを置いていたら大変なことになります。この事で私もヒヤッとしましたから。

何でも親のやることを真似る、実はこのとき自発力が最も旺盛に育つときです。ですから危険を絶対回避した方法で、正しいやり方を教えて何でもやらせるのです。その時です。出来具合を誉めることより、教わったとおり正しくしたことを誉めることです。手順を正しく教え、常に正しい手順通りにするように、身に付くようにさせると、きちんとした結果が出てきます。良い結果は或る意味では正確さの追求ですから、ますます上手くするためには、ますます注意深く正しくするという姿勢を培っていくのです。これが親のしてやれる最も大切な教えです。将来のための、総てに通ずる基本的教育であり、その始まりです。

親の真似をしたがる、この時を軽く見て無視すると親から遊離してしまいます。一体感を全身で信じていたのに相手にされないために、自分の殻に閉じこもる方向へと進み、内心に起こる侘びしさ悲しさと、してみたい要求不全によるストレスから、親の注意を自分の方へ喚起するために、そのための悪戯をするようにさえ成るのです。出来るだけ反応が大きいことを目指してやりますから、被害も大きな物になるのです。

子供は悪戯意識からではなく、生理的精神的な要求ですから本気です。もしその様な事件が起きましたら、余程対処に注意が必要です。単純に叱って済むことではないのです。ですから子供の内的様子、成長過程に起こってくる自然発生的な要求の意味の深さを良く理解しなければならないのです。

事が起きてからの対応策を考えることより、自発の俎にその芽を多方向へ向けさせ発展させることが大切です。であれば決して親を困らせるための悪さなどはしません。心が健全だからです。

男の子は動物的な全身行為が主体です。人形などを人形として扱いません。そこにある一般の物です。

動く部分に対して極限まで動きを試みます。ですから人形の首や手や足は、瞬く間にバラバラにされてしまいます。大人から見ますとそれは破壊に映ります。だから注意の対象になってしまいます。

ですが自然発生的に試みたことは立派な自発であり、事の関係はこうして学ぶものですから、決してむげに叱っては成らない事柄です。寧ろ差し支えのない物を与えて、飽きるまでさせることが大切なのです。学びの初期段階はこうした分解からであり破壊からです。そのためのガラクタを充分に集めておき、手際の良い壊し方を教えてやり一緒に楽しむことです。そのための道具なども専用をあつらえて、収納箱も用意しておくのです。そして上手く分解したところは誉めてやり、難しいところはちょっと手伝いながら、正しい分解方法を教えるのです。

こうして危険なことや手加減というものを身体で修得していく事が大切なのです。時計・テレビ・自転車・単車などと次第に高度な物を扱わしていくと、驚くほど科学性が発達するものです。

大した息子ではありませんが、中学生になりましたら、スーパーカブのエンジンを一時間で取り替えていました。身体と脳が密接に作用するので、左右の手先は片時も無駄なく働き、作業は手順宜しく進む、その事に小気味よさを味わっていたようです。

つまり、小さい時の体験知情報は、身体の全身機能と、それをコントロールし情報処理をする脳との一体型ですから、いきなり精神構造に取り込まれて直ぐに活用されていくのです。ですから知識として取り込む知的機能も発達し、それを身体に作用させる運動系も同時に発達するということです。

ただし、そのような成長をさせますと、画一的で無味乾燥の授業と教師の在り方には全くソリが合いません。この事は不幸とも言えます。心的内容を見て取る教師は殆ど居ませんから、極めて陰湿な処置に遭います。余程注していないと教師によってメチャメチャにされてしまいます。

教師が根源的に悪いわけではありません。ただ、この時代の環境によって出来上がっている精神構造を理解する力がない、即ち、変化に対応できないからです。何故かというと、子供と精神について無知なために、変化する精神の因果関係が分からない。だから適切な対策が取れないのです。従って、今の子供達に、今の先生方ではとても人格教育など出来ません。

言うまでもなく我が国の教育の在り方と教師の質は、伸びる芽をメチャメチャにし人格不全にする点で改善を急がねば成りませんが、決して学校教育と先生方だけが原因ではありません。まず親が人間として健全な自律性を身に付けることに掛かっているのです。

では、この任に堪え得る教師を育成すれば好いではないか。勿論それで好いわけですが、それは不可能

です。何となれば、ちゃんと指導し育てる力量のある指導者が世界規模に於いて居ないことと、そのためのシステムがないからです。暗い見通しですが、我が国の教育を立て直すことは至難中の至難です。よってこのまま未熟な親が続出する現実があり、健全な家庭形成が望めない以上どうしようもないのです。

息子は完全に勉強嫌いになりました。彼自身は弱者を虐める者には我慢が出来なかったようで、しなくてもいい喧嘩をしては叱られ、天然の自発性は先生方を困らせたようです。しかし大勢の友達がしょっちゅう出入りしていましたから、結構人気者だったと言うことでしょうか。

これはいかんと思い、アメリカの大学へやりましたら、物理系に進み、もう二つの大学を出ているのに更に勉強をさせろと言うわけで、別の面で親は今以て大変です。しかし本来的には勉強嫌いではなかったと言うことです。

男女の性差は確かにあります。娘は台所に立つ母親の姿にとっても興味を抱きました。ここら当たりにも違いが出ています。息子は全く別方向でした。何でも親のしていることをやりたがるのは、子供として共通しています。

娘がさわりたまくてうずうずしているのがよく分かります。それならばと、安全に触れるように台をこしらえてやりました。母親に近い視点でまな板に触れられるようにしたのです。親は子供の成長が何より嬉しいものです。ですから頗る楽しそうに、包丁の持ち方や切り方を教えていました。ぎこちないながらも真剣に一切り一切りをする姿は可愛くもあり頼もしくもあり、これからの成長にわくわくするものを感じながら眺めたものです。当の本人は、親のする食事の支度を自分もすることができたという強烈な達成感に感動した様子でした。これらは特に自発性を高めたようです。

とにかく掃除であれ食事の後かたづけであれ、何でもしたりしました。させてくれることを確信してからと言うものは、ずっと母親から離れようとしません。玄関での履き物の脱ぎ方そろえ方、お膳の支度など、瞬く間にマスターしました。きちっと揃ったその整然とした結果に、子供ながらに美しさを感じて、整えることの意義なども知ったようです。テーブルに並べられた箸や茶碗など、日毎にきちっと綺麗に並べられるようになったのです。なにかが面白くて、率先して手伝おうとするのです。

勿論その時には必ず労を謝して、「まあ、お母さんが頼まないのにもう準備をしてくれたのね。偉いね。箸を見てご覧よ。まっすぐに並べられていて、こんなにきちんと出来たら、お母さんと同じじゃない。さすがお姉ちゃんだね。お母さんとても助かったわ。どうも有り難う」

勿論思いがけないことも屢々しでかしますが、それも学習の一端で、「あれれ、これは間違えました

ね。こうすれば、ほら、ちゃんと出来るでしょう」とアドバイスをしては、ちょっとやって見せることで教えていました。

鋏でも何でも使いたがります。鋏は特に成長に有効です。指先の小さな動きが脳を良質に刺激するからです。こうした危険な道具は本人に合った物でないといけません。大きすぎたり切るのがコツが要るようなものは、心地よく思い通りにできませんから、面白さを感じず、興味を失します。従って、手に合った使いやすくて良く切れる物を専用に持たせることが肝要です。

広告用紙をどっさり用意しておいて、手始めに、切り抜きを教えるのです。絵であれ文字であれ、線の通りに切るのです。非常に細かい作業です。細かい注意力が正確さになり美しさになっていくので、たかが鋏、たかが切り抜きなどと軽視しないことです。これを親も一緒になって真剣にするのです。子供はちらちら親のする様子を窺いながら、見よう見まねで修得しますから、一緒にすることが大事なのです。目を輝かせて取り組みます。出来たら如何にも誇らしげに見せたものです。こちらは大いにのって、興味をそそったものです。

早くからこれをして育ちますと、意外な面が発達しました。切っていく速度と紙を持った片一方の手とを同時に動かしていく動的な按排が必要なので、バランス調整機能が発達したのです。眼で確認しつつ両方の手を巧みに動かして目的を達成する、いわば単純な行為ですが、これは知能と身体との緻密な同一化であり、最も健全で安定した理想的な関係なのです。能力的にも注意力・集中力・判断力の総合的な知力を開発することであり、手の機能を繊細にすることでもあるのです。

それよりも何よりも、やれば出来るんだという自信が養われ、それが心をとて安定させるのです。更に素晴らしいのは、何に対しても前向きに取り組むようになることです。感性も自然密着型の繊細でしかも豊かに育ち、とても器用ですから、上手ではなくても、料理でも何でも手際よく楽にこなす力が備わるのです。それは余裕を持った人生が出来るということです。

これら総ての元が、幼児期の最初の興味と悪戯を、如何に有意義に対処するかということです。ここから始まるとすれば、親は豊かに備わっている天然の力、即ち母性本能による直感力を十分に発露し得るように、円満で健全な成長をしておかなければならないのです。ですから親のなす事に何でも興味を持ち、十分に体を動かして全体の機能を発達させることです。決して自然のリズムと流れと要求を阻害しないことです。

それから日本人は頭がよく、とても器用だと言われます。本来の日本人は確かにそうだと思います。そ

これは基本をしっかり培ったからです。計算には九九が欠かせませんが、口ずさみやすく覚えやすい音調も助けになっています。それと記憶力が旺盛な早い時期に、徹底的に暗記させていたからです。

それから漢字の学習です。教え方は大いに問題ですが、縦、横、斜め、点の集合体、それを合成させて文字にする。あの書取は日本人的な緻密な知能を形成するのに大変役にたっています。

ただ悲しいことに、書き順をやかましく言うために、殆どの子供が漢字嫌いになるのです。ああいう深い文化というものには正しく沢山使うことが課題であって、書き順が文字の命ではないのです。実際大人になり社会で文字を使うに当たっては、僅かな書き順の違いなど問題ではないのです。それよりも沢山の漢字を正確に豊かに使うことが大切なのです。一番いやがり、しかも意味のないことをして、わざわざ漢字嫌いにするような教育はどうかと思います。

漢字は語源を知ると大変面白いものです。当時の人々の感性や価値観が分かりロマンがあるからです。ですから基本漢字を一度根底から教えれば、きっと忘れることなく、しかも正しく、より多く使うようになるはずで

と。とにかく理屈無く、指を繊細に使って漢字を書くことは、知性と運動系の統合作用を促進して、自然に緻密性を高めるのです。日本人が器用なのは、無理に知性をつつかずに、自然の発達に則して自発性を育てながら、記憶力の一番旺盛なときに九九を覚えさせたり漢字の書き取りをしてきたからです。そして素直さと正直を大切に、よく手伝いをして体をも鍛えたからです。

人が出来ることは自分にもできる、同じ人間だから出来て当然、という標準意識が自律性の基準にもなっていたのです。ですから日本人はそこそこにみんな何でも出来たのです。こうした民族性にまで成った背景には、人格を形成する精神文化が早くから十分に存在していたために、生活全体に渡っての意識が高かったからです。今は極めて劣悪な状況と言っていいでしょう。

これは人間を理解する上でのお話です。漢字の書き順に関することでもあります。私たちの平素は色々な行為をしています。物を上げたり下げたり移動させたりしますが、それらに慣れてきますと、行動形態として生理的肉体的に整ってきます。

右下から左上に持っていくというのはとても難しく、上から下へ引っ張る行為というのはとても楽でしかも安定した動きです。そういう自然の傾向があります。ですから書き順を喧しく言わなくても、身体が整ってくると自ずから上から下へ、左から右へ書くのです。その方が楽だしそれが自然だからです。それが本来の人間というものです。つまり自然な成長発達を正しく認識すれば、書き順など問題にする

ことはないのです。もっと人間を信じるべきなのです。

誰かが作為的に書き方をさだめて学問化しようとした者が居たからです。文字学をやり人間を知った者からみると、意味無い事柄です。木辺を書くのに縦棒から書いた方がまとめやすい人もおるだろうし、横棒から書いた方が構成しやすい人もおるでしょう。そういうことは個人の得意性に任せておけばよいのです。

抑も、文字も言葉も生き物です。その時代の影響を受けて変化するのです。それが文化の持つ側面です。それを法的に定めて文化を画一的にすることは余程の注意が必要です。行きすぎると漢字嫌いを起こし、結局日本人から漢字を奪ってしまうことにもなるからです。今既にその結果が出ています。若い人たちの何とも貧弱な漢字の知識力がそれです。本当に変な学者が多くなり混乱させるので大変困ります。

人には行動を始め、性格・気性・好みもそれぞれの傾向があります。この違いがあればこそ、みんながそれぞれの特性に従って、それぞれが関係し合いながらやっていけるのです。そぐわないことを無理にさせたり、逆にその才覚を無視してその子を駄目にするようなことはあっては成らないのです。右利きか左利きかだって傾向の問題であり、人の努力を超えた運命的なことも大いにあります。そういう傾向の有る無しを早くから親は知っておく必要があります。

そのためにはスキンシップをはじめとして、あらゆる角度から接して子供を細かく観察することです。争い事に向いていない性格でしたら、少し強気に出られたり言葉などで脅されただけでも呻吟してしまいますから、心の健全性を保ち、綺麗でまろやかな性格に育てるためには十分な指導が必要です。それは親のする事です。

何故なら、最も信頼している存在こそ、最も効果的な指導が出来るからです。ですから親に勝る教師は居ないのです。

そもそもいじめに遭っている事が親に分からないというのはおかしいのです。生まれてからの育て方に於いて、観察力が欠けておるからなんです。変だな、おかしいなと親でしたら感覚で感知できなければいけません。子供が一生懸命自然を装うっておっても、心が子供にとけ込んでいれば親は感ずるものです。神経や動脈がどこかで繋がっておらないと本当の親子じゃないんです。

日本もそう成りつつありますが、先進諸国はエイズや麻薬や拳銃の問題が日常化しております。非常に危険な物が我が国にも迫ってきております。こうした問題に対処するのは当事者自身ですから、そのた

めにも道を道としてきちんと見分けられるように育てなければ、ひどい目に遭ってからでは遅いのです。こうした半ば感覚的直感力のような倫理観は、家庭生活から染み込んで出来上がっていくものです。正に親の存在意義そのものです。お父さんお母さんの平素の生き様と言うところです。

お父さんからこういうことはしちやいかんと言われた、お母さんが人の道を外れたことをする者は人間ではないと言ってたぞ、と親の心が魂に伝わっていれば大丈夫なのです。親の理想やら祈りや人としての道などを、何気なく日常的に語ることです。それが教えとなり訓育となって、精神の中心というか根底にぴしゃっと入り魂となるのです。何気なく日常的に話すところがポイントです。

そうしておけば、判断の基準が親の心に準じていますから、本人は迷いがないのです。自律し自立するには納得できる道理が必要だし、自分の判断に自信が裏打ちされていなければなりません。つまり、感情が不安定では縁の強い方へ流させるからです。それはほったらかしで備わるものではありません。魂に関わる高度な精神性というものは、魂によってのみ培われ育まれるものです。知性や情報とは別口です。ですから親と子がいかに密接な家庭であるか否かということです。家庭の質が問われる決定的な意義は、魂は魂でしか育てられないことにあるのです。

だから親はもっと家庭におるべきです。特に幼児期は母親から離すべきではないのです。劣悪な家庭はその逆ですが、ちゃんとした親である限り最も大切な時期に手元から離すことは、大切な大切な心の根底に穴を開けてしまうのです。施設に預けることは親子の縁がそれだけ削がれます。親の真似をすることによって育つ自発性は、親でなければ駄目なのです。総てが悪い訳ではないのですが、この時期こそ、母親によってしか育てられない大切な心の要素があることを知ってもらいたいのです。出来ることなら中学が終わるまでは、母親は家庭に居るのが理想です。

一方、父親は一家の長として、信頼と尊敬のうえに醸された威厳ある存在でなければなりません。であればきちんとした家庭に成るのです。子供に秩序がないのは家庭に秩序が無いということです。

何故か。それは父親が家長としての健全な内容を有していないからです。そんな家庭で育つと、何が大事で何が枝葉末節なのかが先ず分かりません。弁えの基本がないからです。言うなれば筋道が無いということです。当然分を弁えることも出来ないのです。

家庭には厳然とした序列が必要です。この序列は同時に秩序となるもので、社会性の基準要素の一つですからとても大切なのです。

家には精神的な文化が絶対必要です。最も尊厳の高い部屋、その又尊厳の高い位置などをきちっと弁えた家庭であればよいのです。こうした精神性を封建的だとか、前近代的だなどと言うて排斥する者は、

早い話が精神に奥行きも崇高性もない人です。こういった人はしばしば筋の通らぬ事を言ったりしたりするので。こうした家庭である限り、健全な子供に育てることは出来ないのです。して良いことと悪いこととが弁えられるように育てこそ人間なのですから。

それが育てられないのが今の現実なのです。健全な家庭を形成するためには、ちゃんと成長した者が夫婦となり、そして主婦になり父親になるというこの大原則は、決して変わってはいけません。

したがって両親は、息子なり娘なりをきちっと育てて、これならば嫁に出しても恥ずかしくない。お母さんになってもちゃんとやっていけるだろう。息子ならば、これなら嫁を貰ってもちゃんと主人が勤まるであろう、父親もできるであろうと、親が自信を持って認められるまで育てるのが親の責任なのです。

知能も発想力も優れた人たちは多いのですが、全人的に見ますとはなはだ幼稚です。ある部分は小学校低学年のままです。さらにいえば、体の機能がぐんと退化しているのです。

結婚して父親母親になるんですが、これでは健全な家庭を形成するにはおおよそ無理が多くて大変だろうと思います。理屈を言うことは一人前ですよ。確かに知識も豊富ですし、文明を巧みに使いこなしていく上においては、年寄りが口なんか出せません。親も遠慮してしまいます。だから彼らに対して、足らざることを足らざる、と言って人間的に忠告し、教えてくれる人が居なくなってしまったのです。やりっぱなしということです。その上身体を鍛える自然環境が無くなったために、物事に対処するに構えも腰の入れ方も全く成ってないのです。これでは何をやっても稚拙であり失敗も多いでしょう。それにとっても危険なことです。

つまり、全人的教育をするシステムが世の中から無くなった事を意味しているのです。どんなに未熟であっても、自然体でそれを救ってくれる環境が無くなったということです。これは恐ろしいことです。少林窟は遠慮しません。人間と畜生の境を明確にしていますから、チンパンジーのような食べ方や持ち方をしていると、「君はまだ畜生の性分から脱しておらぬではないか。人間が人間であるためには文化を持て。指先に神経と知性と意志を注いでやれ。それが人間なのだ。食らえばいいというのでは犬猫畜生と同じではないか。如何に真実にするか。如何に一噛みに徹するかを実践するのが禪修行ではないか。分かったか！」とこういう厳しい指導をするところです。

心ある者は一発でなおるんです。でもそういうことを本気になって注意し指導してくれる世の中でなくなったことが不幸なのです。これからの若い人が、実生活に必要な弁えが出来ないと言うことは、これからの社会は更に不健全になるでしょう。お互いの弁えが欠落すれば、共存の関係は殺伐となるばかり

です。

いつもお話ししている通りの坐禅をしてもらおうと、隙が無くなり全身に知性と神経がみなぎってきます。自分の総てに心が行き渡るようになるのはそれからです。自分が深く見えるようになってきますから、恥ずかしくないように、自然に美しく食べられるようになるのです。指が伸び、茶碗もきちっと持つようになり人間らしくなるんです。それはあくまで正しい指導とそうした環境の中にあつてのことです。そうした教育的条件がなければそのままの状態です。それを見習ってこんどは子供が育つのです。思えば今の日本、こんにちの家庭を健全な方向に改革できるか出来ないか。そんな思いを馳せると、私は殆どもう既に時遅しで不可能な気がします。それは親の言うことをすんなりと聞こうとする素直さも、それが当たり前だと理解する能力も、それを実行して身につけようとする向上心等が無いからです。

「こんな難しい箸でなくたって、スプーンとフォークでいいじゃないか」と理屈を言われたら、それに対して、より向上底からの合理的な説明ができるだけの教養がなければなりません。

生活の伝統文化には、確かな機能性の中にも優美さ豊かさがある、その事が響く人間に育てることが大切なのです。

とにかく伝統文化というものは、途轍もない歴史的時間を掛けて磨かれ伝承してきたものです。まさに建国からの時間とその精神が形となり生活の一部になったものです。それが我が国の生活文化であり常識だということをよく語って知らせる事です。そこから日本と日本人ということを深く意識するようになるのです。やがて民族としての誇りを抱くでしょう。

今日本人でありながら国籍不明の人種が急増しています。まさに魂無き家庭の象徴であり、教養も秩序もなくなった悲しい現実なのです。

今の若者を真に理解することは大変困難です。人の言葉を受け取る地場も、受け取った情報の処理も全く異質です。とにかく自己中心ですからとても貧弱な理解しかできません。言葉は伝わっていても内容は殆ど闇に消えています。その原因は、本来の家庭でなかったから精神の基本が整っていないのです。そう成っては本人がとても不幸ですから、折に触れては真摯な態度で語る事です。それが無ければ大人の会話を理解する力が養われないのです。

母親は宇宙で一番暖かくて優しい存在であり、家庭のベースをなすものです。同時に宇宙で一番怖い存

在が父親です。特に父親が怒ったらこれほど怖い者はない、と思う程の威厳が必要なのです。そうした父親でなければ、最後のところのけじめをきちっと教えることは難しいのです。今の親は、みんな子供に遠慮し過ぎています。それは父性本能が発刺と機能していないから、自信をもって育てるだけの精神的成長をしていないからです。やはり時代性によるもので、退化現象と言うべきでしょう。

皆さんの家庭にあっては、床の間や仏間は最も尊厳の部屋として、品性も尊厳も充分持たせて、平素妄りにそこを使わないよう区別することです。他の部屋と同視せず画然と区別することからです。そこへ入った途端に身心が自ずから引き締まる領域にしておくことです。そして上座に座った人がどういう存在かが、感覚的に自然に分かるように、きちっとした分のわきまを培うのです。

人間として分をわきまえる基準がなければ、対応するのに困ります。となるとやはり家庭が第一となるのです。

お父さんはどんなにくたくたになっても、玄関へ入る時はしゃきっとすべきです。履き物もきちっと脱いで、ネクタイを取るのもばさばさと取らずにゆっくりと取って、ゆっくりと掛けて、そして一日ご苦労様といわんばかりにネクタイをすーっと整えて、徐に背広を脱いで、徐に背広を掛けて、そして真正面から奥さんの顔を改めて見て、「ただいま。お母さんご苦労様」、子供達の顔を見て「今日も何も無かったかい」と、温かく鋭い眼差しを送るのです。この瞬間に、子供は父に絶対感を抱き、父の威厳に逆らえない一筋の信念を見て取るのです。生き物として本能的に従はざるを得ないという関係の確立と同時に、頼り甲斐も信頼感も自然体で確立するのです。これがないと、信のない精神構造となり自己中心になるのです。いうなれば心に尊厳性が培われていないために親を軽視した精神となり、不健全な親子関係になるのです。

なにごとも無かったら「良かった、良かった。お父さんも疲れたけれど、お前たちの元気な顔を見たら救われるよ」と言って、そこから一家団欒の、楽しい夜を形成していくのです。そこをいい加減にするから、子供が父親の存在も威厳も感じないままに横滑りしてしまうのです。だから如何に疲れて帰っても、一歩入ったら家長であるという自覚だけは失わないで対応して貰いたいのです。

そればかりでは窮屈な面が強調しますから、何かの時にはうんと奮発することです。例えばお祭りとか、お正月とか、おじいちゃんの命日であるとか、誕生日とか、そういう事はけじめを付けるべきことであり一家の記念すべき時ですから、惜しまずに振る舞うことです。そしてその記念すべき日の意義と

いうものを、一家全員で共有するように語りかけるのです。これこそ親しかできない事柄です。その家だけの精神であり文化を大切にすることです。

おじいちゃんはこの人だったよ、お前達に会わせてあげたかったな。本当に素敵な人だったんだ。お前達のおじいちゃんお婆ちゃんの命日は絶対に忘れちゃいかんぞ、という風に語るだけで良いのです。そうした厳然とした命の流れの話を聞くと、自分が今日存在しておることの命の宿命的な関係等について新たに思いを馳せるようになり、孤独感が一変して存在に尊厳を感じるようになるのです。これが世代間を超えた連帯感となり、自然に孤独感を解消するのです。こうやって縦から、横から、心がかっちり健全に刺激し繋いで育てさえすれば、今日の見当も付かないような多様化された情報の中にぼんと放り出しても、きちんと分別し対応してやっていけるのです。

今は夫婦間も、親子間も、兄弟間もそれぞれが、別々な意識で暮らしていますから、何時も心の片隅にすきま風が吹いていて孤独なのです。何でもない時は自由でいいかも知れません。が、心に引っかかる出来事などが生じた場合、一人で悩むことになるのです。本来なら家族に囲まれているだけで解消されていましたが、共有する心が無ければ通じ合えず、寂しく侘びしい関係となるのです。ですから健全な本来の家庭の大切さ、有効性を改めて自覚してもらいたいのです。

皆さんにはいささか古典的な教育観に思えたかもしれません。教育観というよりも精神を健全に育てるために、親の心得としてそうあるべきだということです。精神が構造化していく因果関係の上から、そうあらねばその様に成らないし、それが自然だということです。ですから理念としてではなくて、精神の特性として、人間性を高め健全な自律を形成するには、その様な必要条件を満たさなければその様には成らないということですから、具体的な話しとして理解して下さい。そうした努力を怠ると、後で大変なことになる確率が極めて高いことも理解すべきです。

驚いたんですが、大都会の夜昼が無いような分けの分からない環境じゃない、まだまだ自然が残っている小さな町のことです。ちょっと家庭の中に入ってみると、まあ心配の無い家庭は十軒に一軒か二軒あるなしです。八軒まではがたがたです。しかも悲惨な家庭も可成りあったのです。こんなになる前にどうして、と思うんです。

残念ながら問題が相当に深刻化して初めて外部に助けを求めるのです。田舎特有の精神性か、心にカーテンが掛かっているからでしょうか。その時には子供はがたがたになっていて、とても可愛そうですよ、深く傷ついていますから。その様に成っている子供の心情としては、もう家庭でもなく親でもない

状態にまで崩れています。とても荒れていて、どうにでも成れ、どうせ自分は幸せになんか成れるものか、と自虐的になっています。ですから一寸したことでも直ぐ切れるし滅茶苦茶が出来るのです。

それは恨みも怒りも憎しみも同時に亢進し激情しますから、自制力などはとっくに吹き飛んでしまい、即何をするか分からないと言う状態になるのです。身近にこの手合いがごまんと居るのですから、まさしく今、何事が起こっても不思議ではないのです。

げに、心の不思議さ、その健全育成の大切さを思うと、私達のこの社会の方向性が見えて来るようです。結婚、家庭、親、育児と教育、その環境など、総て将来を左右し人類の存亡を左右する事柄です。その根元が心にあるのですから、一人々々がもっともっと修養精神を培い努力してもらいたいものです。でなければ、もうすぐみんなが悲惨な目に遭うことになるからです。

湛然さん、貴方も出家者として、これからの日本を、同時に世界を憂いて居られるでしょう。やはりこの法を活かし、道のために道を行じて、いかにして世に貢献したら良いのかお考えの筈です。今は修行者としての立場から、どう思われますか。何か一言。

湛然師：老師が色々仰いましたけれども、私個人としましては、自分の両親とか、家庭を持っている自分の兄ですとか、その家庭の人間関係等を見ますと、老師の仰るような秩序や健全な家庭の心などはなかったんです。私も親を尊敬していませんでしたし、だからそう言う親になりたくないという意志が、出家した理由の一つとしてありました。

本当に人間らしい生き方とは何なのか。自分としての自信が持てる生き方、そういう指針が持てない限り、人にどうのこうのと言えません。まず自分自身がちゃんとした存在にならない限りどうしようもないと痛感しておりました。ですので、兄のところへはたまに挨拶をかねて遊びに行くんですけども、子供に対しては典型的な学歴主義ですかね。それ以外価値観がないと言う感じもするんです。親に対する子供の見方は、父親の存在感が非常に薄くて、何か知らないけれども生き辛いと言う感じです。

私もお寺に関係していることもあって、他のご家庭を見ても同じような風景が広がっていることを実感しています。これがまさしく戦後の日本かなと、或る意味でとても危機感を抱き、又住み難くなっていることに悲しさを覚えます。戦後からずーっと続いて既に五六十年の姿なのかなと、自分の非力を含めて虚しい思いで居ます。

だから老師が仰ったフランスやアメリカ等、先進国の家庭と青少年の姿とかいうものも、まさしく全世界的な根本的な問題として大いに考えさせられます。これからの日本が歩いていく姿なのかなと思いま

す。だからこういう中で今一番問われているのは、一人一人の自覚された生き方というか、真の自律をするための指針が問われていると思います。私自身もこれを益々磨いていくことが修行者としての本分だと思っています。

老師が仰ったように、今こそ人間の本質に基づいた自然のリズムを大切にし、精神性豊かな家庭環境なり学校教育など、子供達の心を育てる環境を大切にしなければいけないと痛感しています。そうでなければ、これからの日本は取り返しがつかないほど駄目になるなと思います。

それに先駆けて、やはり心の決着を付けることが第一ですから、老師のもとで本当に坐らねばと思って今日も来ました。きっと皆さんもそうだろうと思うと、力が湧いてきました。有り難うございました。

平成十三年四月十五日